

# 日本語「自己実現」の内実の歴史的変容についての 覚え書き

佐々木 英和

宇都宮大学共同教育学部研究紀要 第72号 別刷

2022年3月



# 日本語「自己実現」の内実の歴史的変容についての 覚え書き

A Note on Historical Transformation of the Implications  
of the Japanese Word *Jiko-Jitsugen*  
Indicating Self-Realization and/or Self-Actualization

佐々木 英和<sup>†</sup>  
SASAKI Hidekazu

## 【要約】

自己実現という日本語は、その歴史的多様性に気づかれることなく、超歴史的に理解されがちである。だが、言説分析の研究方法论に関して言えば、自己実現についての言説の長期間にわたる蓄積を歴史的に相対化することは、不可欠なことであり効果的である。この論稿は、120年以上を見すえて、日本において、その内実がどのように変化したかについて、簡略に叙述するものである。

キーワード：自己実現、自我実現、個人、社会、トーマス・ヒル・グリーン、アブラハム・マズロー、第二次世界大戦、全体主義、人権

## 【Summary】

*Jiko-jitsugen* is a Japanese word meaning self-realization or self-actualization. As for the research methodology of discourse analysis, it is essential and effective to historically relativize a long-term accumulation of discourses on *jiko-jitsugen*, although we tend to understand this word from a transhistorical perspective, without taking any notice of its historical variations. This paper describes simplistically how its implications have changed in Japan for more than 120 years.

**Keywords:** Self-realization, Self-actualization, Individual, Society, Thomas Hill Green, Abraham Maslow, World War II, Totalitarianism, Human Rights

## 1. 導入的議論

日本語の「自己実現」は、“self-realization”もしくは“self-actualization”といった英単語から訳された単語である。いったい、「自己実現」とは何だろうか。当然のごとく、この問いは、他のどのような問いよりも先行されるべきである。しかし、この段において、筆者は、問い方を変更することが基本的に必要だと強調しなければならない。我々は、これまでにおいて「自己実現」が実際にどのよ

<sup>†</sup> 宇都宮大学 地域創生推進機構 (連絡先: sasakih@cc.utsunomiya-u.ac.jp 佐々木 英和)

うであったかについて、慎重に考察しなければならない。というのは、「自己実現」とは何であるかという問いに対する答えは、時と場合によっては、ひょっとすると変化していたかもしれないからである。良きにつけ悪きにつけ、実際は、「自己実現」を含むあらゆる言葉は、そもそも様々な解釈され、自ずと多様化していく宿命にある。特に、人間の価値観にさらされた曖昧な単語は、圧倒的多数の人達によって容易に影響された固定観念に大いに依存する。

そういうわけで、「自己実現」の概念を、時間と空間を越えた普遍的な概念とみなしてはならず、むしろ歴史的に多様化するものとして把握するべきなのである。この論稿の主目的は、「自己実現」が、日本において言葉の形としては首尾一貫しているのにもかかわらず、実際には歴史的に変化してきた様相を概略的に記述することである。

## 2. 研究方法論に関する覚え書き

方法論的に言えば、日本における“self-actualization”もしくは“self-realization”の概念が社会的・文化的に変容してきた側面に注意を払いながら、年代順に「自己実現」の概念的多様性を整理し配列することが重要である。こうした過程の前提に関して、社会的・文化的状況に用いられるとともに影響され続けてきた「自己実現」言説の歴史的特徴を、筆者は明らかにしようと試みるものである。

例えば本・雑誌・新聞のような様々な日本語による言説的資源から、「自己実現」の数多くの言説を、筆者は実際に収集してきた。実務的には、記述的な素材を集める際の効率を高めるために、読売新聞と朝日新聞といった2つの日本の新聞から作られた2つのデータベースシステムも、筆者は活用した。

加えて、筆者は、基本的には、テキスト・マイニング技術を用いたコンピュータ言語分析を利用したが、くつきりとなるよう観察して自己実現言説の特徴を取り出し、文脈上の意義を明確化しようと試みたこともある。計算言語学で用いられるこの方法のおかげで、筆者は、仮説を試して、ある程度の説得力のある証拠とともに、それらの正当性を確認できたが、それは、書かれた文のような質的なデータを量的な水準で蓄積したものを再整理するのみならず、量的なアプローチの結果を通して、質的な研究の説得力を強化したからであった。

あらかじめ、筆者が「自己実現」についての記述的資料を精査したことから得られた重要な歴史の境界線を示しておこう。筆者は、その歴史的受容について、第二次世界大戦の前後の二つの時期に分けたのである。「自己実現」という単語は、元々は、イギリス英語の“self-realisation”か、アメリカ英語の“self-actualization”から翻訳されたものである。戦前の時代では、英国の思想家であるトーマス・ヒル・グリーンの自己実現思想は、倫理学分野に導入され、日本語に翻訳されて、その後は、若い知識人層に次第に吸収されていった。終戦後、10年以上の合間を経て、アメリカの心理学者であるアブラハム・ハロルド・マズローの自己実現概念が、主にビジネス経営研究に導入された。マズローの仕事は敏速に人気を獲得したが、たいていの日本人は、「自己実現」という単語の爆発的な広がりにもかかわらず、彼の名前を徐々に忘れていったわけである。

## 3. 第二次世界大戦前の日本における自己実現

近代日本の歴史は、200年以上維持されていた鎖国政策を終えてからの1868年の明治維新にまで遡れる。明治初期の時期に紹介された近代思想は、主にイギリスとフランスから来たものであった。筆者は、近代西洋の倫理的な流れの1つの中に「自己実現」の原点となる思想を位置づける。

### 3-1. 日本における自己実現思想の発祥

西洋で勉強した多くの日本人の1人である中島力造は、アメリカ合衆国のエール大学から、イマヌエル・カントの哲学の研究で博士号を取得した。中島は、1890年に日本に戻ってからは、東京帝国大学で倫理学について講義し始めた。1892年10月19日に東京帝国大学で行われた哲学会の集会で「英国のカント主義者について」で、中島は、トーマス・ヒル・グリーン<sup>1)</sup>の倫理学理論を紹介したが、グリーン理論は、イギリスとアメリカ合衆国で広範囲にわたり注目されていた最新の理論として高く評価されていたものである。

オックスフォード大学の倫理学の教授のグリーンは、政治哲学者であり、19世紀のイギリス理想主義運動の指導的立場にある構成員であった。グリーンは、ギリシア哲学を研究し、世界的に著名なドイツ哲学者であるカントやフリードリッヒ・ヘーゲルにより代表されるドイツ観念論の研究に没頭した。詳細に自己実現概念を叙述している『倫理学序説』を含めて、グリーン<sup>2)</sup>の主要な仕事の大部分が、1882年の彼の死後に発表された。

手短かにとはいえ、日本で初めてグリーン思想を説明したことのある日本人倫理学者たる中島が、1895年12月に、イギリス英語の“self-realisation”を、日本語の「自我実現」と翻訳した。「自己」も「自我」もともに英単語“self”の翻訳なので、この翻訳語「自我実現」は、一般には、ほとんど「自己実現」という用語に酷似していると考えられた。注目すべきことだが、中島は、ジョン・ヘンリー・ミューアヘッド<sup>3)</sup>によって書かれた『倫理の本質－倫理的哲学概論』と題された本の導入を通じて「自我実現」という新語を造り出したのである。

ミューアヘッドは、グリーン<sup>4)</sup>の難解な自己実現理論を単純化した英国の理想主義者であった。ミューアヘッドは、主にオックスフォードの大学拡張を通して、哲学と倫理学を含めて、普通の人々が様々なタイプの知識を理解するのを容易にするよう努力していた。

こういうわけで、グリーンが主に自己実現思想を定式化したとはいえ、「自己実現」も「自我実現」もともに、ミューアヘッドの思考から始まった思想だとみなせるわけである。ミューアヘッドの理論に基づいて、中島は、自己実現と等価の「共通善」が個人と社会との調和に依拠すると強く主張した。これは、個人は、社会につながらずには自分の「自己」を実現することができないという真理を根拠としている。この理論によれば、実現される自己は、理性に喜びを統合する調和的な存在でもある。

このようにして、“self-realization”を意味する日本語の「自我実現」は、19世紀の終わりに出現したが、基本的には、個人と社会との間の調和的な関係を象徴するものとして定義された。グリーンやミューアヘッド以外には、ジョン・デューイやマッケンジー<sup>5)</sup>が書いた倫理学書も出版されたが、どれも似たり寄ったりの自己実現思想を展開していた<sup>1)</sup>。なお、「共通善」が強調されたため、古代まで遡る形で、自己実現思想の源流にアリストテレス哲学が位置づけられることもあった<sup>2)</sup>。

### 3-2. 日本における重要な倫理学キーワードとしての「自己実現」

東京帝国大学における中島力造の講義に出席していた若い学生の中には、グリーン<sup>6)</sup>の理論に非常に興味を持った者もいた。例えば、西田幾多郎<sup>7)</sup>は、1911年に出した有名な哲学書『善の研究』の中で、自己を発展させ完成させること、つまり自己実現を実践することが善であると主張した。

1895年から1905年までの約10年間で、「自己実現」もしくは「自我実現」という単語は、若い知識人<sup>8)</sup>の間で急速に広がった。これには、自己実現についての論評が、この時期の中等教育の修身カリキュラムの中に組み込まれていたことが大きな理由になっている。

自己実現思想は、調和を志向するすべての事柄を伴う形で、穏健な意味合いを獲得していた。筆者は、「各々の個人の中で展開する調和」、「社会との調和」、「神的な存在との調和」といった主に3つの類型につながっていく調和についての思考を分類した。

もっぱら自己探求に集中している個人主義的な自己実現は、たとえば井上哲次郎のような封建主義的な思想家によって、厳しく非難され続けた。社会志向の自己実現は、明治政府によって最も推奨されうるものとして、薦められ続けた。神的な自己実現は、多くの人間の中における個人と神的な存在との関係がグリーン理論の中心的主題であるにもかかわらず、その当時の日本では、少数派にすぎなかった。日本の東洋思想家たる小柳司気太などは、グリーン思想が西洋を精神的起源に持つのにもかかわらず、仏教・儒教・道教・神道のような東洋思想と矛盾しないと指摘して、グリーン思想の宗教的側面を高く評価していたが、そういった側面は決して主流にはならなかったのである。

実際のところ、日本におけるグリーン思想の吸収は、必ずしもグリーンの中核的思考と相反していたわけではなかったけれども、それらの正確な解釈の過程というより、グリーン思想を日本化する過程であった。日本における自己実現の受容とは、その当時の文化的・社会的条件に強く影響されながら、グリーン ideal 主義的な思想が、いかにして彼の理想主義の考えが軽はずみな楽天主義に陥っていったかを例証する歴史的事例となってしまったのである。

### 3-3. 日本における初期自己実現思想の挫折

1902年に起きた哲学館事件は、本稿では、日本における初期自己実現思想の深刻な挫折とみなせる。明治時代の公権力が、最高学府で行われていた倫理学教育の具体的内容に断固として介入してきた。文部省の役人が、ミューアヘッドの自己実現理論について、各々の個人が社会全体から切り離されていることを許容し、個人が無制限に自分自身の欲望を実現しようとする概念であると、一方的に決めつけてきた。その役人が不当に言いがかりを付けてくることとしても、ミューアヘッドの自己実現思想にしたがえば、盗賊にとっての善が、強盗を働くことにより「自己」を実現することであるし、国王殺害者の善は、自分の国の国王を殺すことによって「自己」を実現することなのである。

つまるところ、新聞や雑誌のようなマスメディアによって非常に多く公表された一連の出来事は、ミューアヘッドの倫理学が日本国の国体を脅やかす危険な思想であるという印象を残した。その後、ミューアヘッドによって単純化された自己実現理論は、もっぱらグリーンの名前が冠せられて広がり続けたが、それは、多くの学者が自己実現理論を説明する際に、ミューアヘッドの名前を使うことが不都合であると感じていたからである。

加えて、日本語の「自己」と「自我」は、どちらも英語で“self”を意味するものだが、それらの言葉が、社会との調和を拒絶しているように思われ、わがままを連想されやすいので、自己実現理論が論じられる際には、避けられがちなことが増えていった。英単語“personality”から翻訳された日本語の「人格」が、「自己」や「自我」の代わりに採用されることが圧倒的に増えたのである。その時点では、「人格」という言葉は、個人と社会との間の調和の状態と定義され始めた。さらに、初めてイギリスから自己実現理論を輸入した中島力造は、不必要な誤解を避けるために、「人格実現」という表現を使用することを提唱し始めた。

### 3-4. 自己実現概念の日本的な国家主義的發展

それ以前の時期と反して、1930年代から1940年代初期までの時期は、「自己実現」や「自我実現」

という言葉が、しばしば日本的な国家主義のために用いられた期間であった。逆説的なことに、自己実現に関する言説は、政府が個人主義を厳しく抑制するために利用されたのである。

井上哲次郎は、若いインテリ層に対して、自己実現へと到る最も良い方法が教育勅語に簡潔に書かれていると提案した。同時に、井上は、自己実現の特定の内容が、自己修養を通して社会への個人の献身につながっており、おそらく自己実現は自己犠牲なしで達成できないだろうと論じた。井上は、個人と国家との水平的調和を好ましくない非現実的なスローガンとみなして、一人ひとりの個人に対する全体社会の優越を力説した。

影響力のある哲学者の中には、一人ひとりの個人よりも帝国が優越するという意見を、人々に直に押しつける者もいたが、そうした考えは、1889年に明治天皇によって下付された憲法の精神に奉仕する比喩的表現に変えられたものである。ヘーゲルの弁証法を東洋思想に適用することにより東洋思想を再編成しようと試みていた紀平正美は、自己実現とは、諸々の自己が神聖なる国家に対する無私の奉仕を常に土台として実現される場面たる「人格の完成」と同一視されると主張した。第二次世界大戦の直前にはすでに国民道徳を体系化していた吉田熊次は、「天皇への忠誠」は「完全なる自我実現」を意味すると断言した。このようにして、「個人と社会との水平的調和」といった思想は、「全体社会への諸個人の垂直的統合」といった考えに強力かつ巧みに転回させられたのである。

国家による強制的性質にもかかわらず、多くの人々が、あたかも国家に対する無私の献身在自発的かつ自然発生的であったかのように感じていた。こうしたことが生じる部分的な理由としては、自分自身の幸福を達成するためには、偉大な存在に統合して自己放棄するよう、しばしば個人に動機づけるような東洋的な宗教思想が深く根付いており、そうした思想が持続的に存在していたことがある。真の自己とは、低次の自己を高次の自己へと融合することでありえたので、一人ひとりの個人が小さな自己とみなされ、国家が大きな自己とみなされたときには、自己実現が後者に対する前者の融合を意味したのである。

結果的に、自己実現が熱心に奨励されればされるほど、帝国と諸個人との結合がいつそう緊密に促された。国家主義・超国家主義・全体主義が徐々に台頭していたことに対して無力さを感じていた人もいたけれども、国家と真の自己とを同一視しつつ、自らを国家へと統合しようという夢に熱狂的に酔っていた人もいたのである。

日本では、そもそもは一人ひとりの個人に対する慎重な配慮を欠かすことのなかった自己実現理論が、分離された個人としての自己を拒絶するといった思想に変換された。筆者は、エーリッヒ・フロムの「自由からの逃走」に準えて言えば、この日本的な事実について、「一人ひとりの個人たることからの逃走」と呼んでおきたい。

筆者が見いだして明らかにしたのは、日本の自己実現の歴史を探究していけば、第二次世界大戦前の近代日本における自己実現理論の受容とは、国家主義や、究極的に超国家主義・全体主義へとつながる精神的な基礎の一つを意図せずして準備しながら、諸個人を漸進的に否定していく過程であったということである。

#### 4. 第二次世界大戦後の日本における自己実現

日本が1945年に第二次世界大戦で完敗を喫するとすぐに、連合国軍総司令部は、全体主義国家を民主的な国に変えることに着手した。一人ひとりの個人を尊重するという理想を含む日本国憲法が1947年に効力を発した後に、日本国は日本の人民のために存在するという考えが、日本の大衆が無



条件に日本国家に奉仕するべきであるという考えに取って代わる端緒となった。戦前日本の倫理学が直に日本の過酷な軍国主義に関係していたので、自己実現に関わる諸々のスローガンや思想も、不正確な形で忘れ去られた。「自己実現」の内容が、日本史における相当に大きな空虚を経て劇的に変化したのは、潜在的には全体主義から民主主義への国家的転換を土台としていたからである。

#### 4-1. 心理学的なキーワードとしての「自己実現」の再生

国家主義の烙印を押されたという意味での「自己実現」と「自我実現」はともに、第二次世界大戦後の日本の民主化の発展に伴い、時代遅れになった。しかしながら、日本の生活様式にアメリカ化されたものが次から次へと入り込んできたことが、「自己実現」が再生する機会を開いたのである。

注目すべきことだが、アメリカの人間性心理学者たるアブラハム・マズローによる自己実現の理論は、1950年代半ば以降からアメリカ合衆国で人気が高くなった。こうしたことが生じた部分的な理由として、その理論が、極めて単純化され整理されているものと理解されていたことを指摘できる。すなわち、自己実現とは、生理学的な必要性、安全、所属と愛情、承認したりされたりすること、自己実現という順で並ぶ5つの層を構成している欲求階層論の頂上に置かれる。「自己実現」という言葉は、“self-actualization”という単語が日本語に訳されることにより、長い休眠状態から目覚めたのである。

1960年代に、マズローの理論は、特に日本のビジネスマンの間で人気を獲得し始めた。たしかに、わずかながらだが、学校の教育者や教育学を専門とする学者の中には、個人が自己開発を通じて到達すべき究極の個人的目的として、「自己実現」を位置づける人もいた。しかしながら、マズローの理論は、熟慮されることのないまま、経済成長が個々の人間の幸福にとっての必要条件であることを取り決めている理論として誤解されることも一般的であった。自己実現とは、個人の経済的成功のシンボルであるかのごとく考えられることもしばしばあり、その時代の経済が強調されるのに伴い、個人の社会的な成功の頂点として誇張されることも時折あったのである。

結果的に、日本に住んでいる諸個人が人間の成長にとって崇高な目的だとみなすような崇拜の源泉としては、社会全体が日本国に取って代わったけれども、社会は、個人によって活用される単なる活躍の舞台にすぎなくなった。教育的な場面においてさえ、「自己実現」は個人の内面的問題として扱われる傾向があり、それが社会的な活動と密接した概念とみなされることは稀だった。

#### 4-2. 「自己実現」についての偏った理解の大衆化

1960年代から1970年代にかけて、「自己実現」の考え方は、経済・労働・経営・政治・教育といった様々な分野に次第に広がっていったけれども、そうした考えは、日本の政財界で特に歓迎された。自己実現は、国の経済成長によって人間の幸福が獲得されると言われている時代の日本の社会の雰囲気を出す形で、経済的成功に傾き気味の社会的成功のことだと考えられた。日本のビジネスマンの中には、あたかも日本人の人的成長と同期化する形で、日本国の経済が成長したかのように考えた人もいた。

1970年代の自己実現を特徴づけるキーワードは「業績主義」であり、エリート団体のメンバーが自らの能力と才能に基づいて報酬を与えられたり昇進したりするシステムである。当時の自己実現は、生まれつきの潜在能力によるというよりもむしろ、その代わりに実力と努力を通して達成されるものであったが、ある意味では、日本の社会階層の頂点に位置していた。そのために、働く男性にとって、



自己実現とは、究極的ではあるが、非常に個人的な目標になった。

奇妙なことに、マズローの欲求階層論は、特に日本のビジネスマンの中で流行し、特定のイデオロギー的な役割を果たすように見られた。1970年代には、自己実現の理想が、人々が勤勉に働いて猛烈に金を稼ぐことを効果的に動機づけることになりえたので、「自己実現」は、日本の経済的成功を象徴する言葉の1つとなった。皮肉にも、マズローの自己実現という理想は、多くの場合、名ばかりのものとしてしまった。マズローは、典型的な資本主義者というレッテルを付けられてしまうことがあり、それゆえに、日本の社会主義者や共産主義者の中には、マズローのことを、有名な心理学者というよりも悪名高い経済学者だとみなして非難する者もいたのである。

#### 4-3. 「自己実現」の社会的普及

多くの日本人が、自己を実現することを望んだが、同時に、経済生活で成功して出世することが不可能でなくならなければ、自己実現はとても困難なことだと思っていた。1970年代的な自己実現は、エリート主義のイメージで支配されていて、ごく一部の人に限定されており、万人が近づけるようなものではないとみなされていた。それにもかかわらず、多数の人々が自己実現には憧れを抱き続けており、1980年代には、自己実現の新しい形態が、当時の社会的状況の中で出現したのである。

日本で経済成長によってもたらされた「消費社会」は、1970年代から1980年代にかけて、すでに成熟していたが、そうした社会は、自己実現思想に、注目に値するような影響を与えていた。多くの人々が、商品・設備・装置などのような、物質的な事物を消費することによって、人生における自分の楽しみを見出し始めていた。1980年代に生きている人々はまた、物質主義のみに頼るのではなく、趣味や個人旅行などに余暇時間を用いて、自己実現の時を見出した。

1980年代の自己実現を特徴づけるキーワードは「私事主義」であり、個人的もしくは家族的な興味や幸福に対する追求であり、身の回りより広範囲にわたる社会問題あるいは社会的関係を棚上げする形での理想である。物質主義的な豊かさとは、1980年代の自己実現のイメージを作り出す原因であるというよりもむしろ、その条件であった。これらに関与する人達にとって、私的な時間は、自分自身の自己実現に適していた。それゆえに、1980年代の自己実現イメージは、自己満足や自分本位と同一視される傾向があった。

保守的な男性の中には、女性が家の外で働くことによって自己実現を達成することを望むことについて、わがままであると決めつける人もいた。1980年代の女性たちは、こうした類の意見が存在したにもかかわらず、新しい社会的な法律上の運動を生み出した。1986年に制定された男女雇用機会均等法は、「自己実現」の一般化と普及という観点からすれば、顕著な画期点だった。実際、この言葉は、主流のメディアに現われて、1980年代後半から女性の社会進出と歩調を合わせて一般化した。女性たちがどのように社会に関与すべきかという問題には、「自己実現」というキーワードの広がりとともに、ますます焦点が当たった。女性の中には、実際に彼女らが成功したかどうかは別問題として、「仕事を通じた活動的な自己実現」のほうを「結婚を通じた受動的な幸せ」より好んだ。それゆえに、「自己実現」を求める女性が労働社会に参加することが、深刻なまでに重要になった。

それに対して、1980年代の若者の中には、私生活に徹底して、自分なりのやり方で、消費者としての生活を楽しむ人もいた。そうした若者は、いかなる形であれ未来への投資をすることによってでなく、今という時間の価値を味わうことによる「自己実現」に類似した感受性を見つけ出した。「自己実現」は、公的な事柄よりも身近な事柄のほうが優先されることを正当化する考えであるとみなされ

ることが時折あった。そうした若者は、個人的な自己実現が社会への関わりを持たずに存在しうるし、自己実現のための課題が、一人ひとりの私的な個人の能力の範囲内でなされるべきだと信じている。さらに、個人的な自己実現は、自分勝手と混同されることがあまりに頻繁にあるので、自己実現を社会全体のつながりを乱している主要な原因であると早まって判断する人もいるほどである。

#### 4-4. 「自己実現」の考え方の現代的な多角化

1990年代の前半には、社会が個性を振興すべきであると主張する人も出てきたので、「自己実現」は、1980年代の個人的自己実現に共鳴して確固たるものにするように、国策におけるキーワードとして強調され始めた。1992年1月には、宮澤喜一首相が、労働時間や通勤時間を社会全体として短縮することによって、仕事時間よりむしろ余暇時間において個別に自己を実現するという概念を強調した施政方針演説を行った。筆者は、宮澤首相の演説が、「自己実現」という単語の普及の歴史という観点からすれば、自己実現の個人的な性格を一般化する点で重要な役割を果たした画期的な政治的な出来事であったと考える。なお、辞書に掲載されているか否かを基準にした言い方をすれば、1990年代初頭にはまだ市民権を得ているとは言いがたかった「自己実現」という日本語は、1990年代末には十分に一般的な日本語として定着しているとお墨付きを得た<sup>3)</sup>。

むしろ、組織第一主義的な考えが、それまでの日本の従来への傾向ではあったけれども、1990年代から、個人的な自己実現は、自由と自立に対する強調度合いを増す方向で、新しい社会的な枠組みとして、なじみ深いものとなった。実際、企業が、公共的な使命として、先取って個人の自己実現を助けるべきであるという考えが、新しい組織理論として時々主張されたのである。

しかし、1990年代には、他者とのつながりにおいて自己実現に類似した感覚を経験し始める人も増え始めており、それは、直に面と向かってつながる場面だけでなく、インターネットの爆発的な普及のおかげで、電子メールや電子掲示板などを通じて可能になっていた。1990年代後半からは、「自己実現」が、「社会への参加」と「社会に対する貢献」とが言及された言説において、人気の高い話題になった。1999年の国際高齢者年は、高齢化した個々人が心の底から自己を実現すべきだと気づかせようとする踏み台となった。高齢者の中には、社会参加や社会貢献という形式で、ボランティア活動に対する積極的な関心を示し始める人もいたが、その中には、人間関係を創出することも求めていた人もいた。こうした現象は、「関係」が、1990年代の日本の自己実現を特徴づける際の主要なキーワードであったという結論を導く。筆者が、この種の「自己実現」を「関係主義的自己実現」と呼ぶのを許容願いたい。

2000年代には、自己実現の行為主体は、いっそう多面的なものと化した。障害を持っている人の社会参加が重要な話題になったのは、社会参加が、そのような人達の自己実現の重要な機会であると期待されたからである。子どもの自立を尊重する教育の普及のおかげで、教師は、子供たちが自己実現したがる欲求を認識することができた。2003年に出された中央教育審議会答申は「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の全体構想について」と題されていたが、その影響により、日本の教育者の中には、個人的自己実現を、個性・能力・創造性といったキーワードと結びつけて考える人が出てきた。

#### 4-5. 人権の一種としての「自己実現」思想

自己実現の具体的な内容が何かについて、実際的な方向で考えている人は、極めて少ないように思

われる。だが、人権尊重という文脈によるならば、「自己実現」思想とは、各個人が、お互いに交換不可能であり、あらゆる瞬間において各々の生の時間を反復不可能なものとしてしか生きえない唯一無二の生命体であるという見解を、社会が尊重するよう推奨するものである。こうした思想は、人間が、生まれつき「かけがえのなさ」を持つ個人として、自らを深く認識することをめざすべきだとする暗黙の社会的な動きを明白に反映している。たとえば、女性は、「誰かの妻」とか「誰かの母親」といった付属物的存在としてでなく、くっきりとした輪郭のある固有の個人として、強く認められたがる。

実際、「一人ひとり」とは、自己実現言説では頻繁に用いられる無自覚的な決まり文句であるが、それゆえに個人の実質的な内包を意味するものである。この成句に厳密に基づくのであれば、社会に生きる各人は、「何人かいるうちの単なる一人」というように、モノのごとく扱われてしまうのは不適切であり、繰り返し出現でき、他の誰かや何かとたやすく交換できるような抽象的な数字のごとく扱われるべきではない。諸々の個人とは、まさに個別的には具体的な存在たる手応えのある一個人として尊重されることが、それこそ妥当なのである。

人権尊重に究極の優先順位を置く立場に立つのだとすれば、個人的自己実現の本質とは、生命体たる存在が、一回限りの生を営むにすぎず、根本的に互換不可能であるという揺るぎない事実肯定的価値を見出すことである。この文脈における自己実現は、わがままとカエゴイズムといった汚名を着せられることも時折ある個人主義を擁護するとともに、束縛されないこと及び自由や自立といった言葉の自律的な価値を称揚するものになっている。

## 5. 暫定的な結論

筆者の歴史的精査によれば、「自己実現」という日本語は、元々は、イギリス英語“self-realisation”が日本語の「自我実現」に初めて訳された1895年に出現したという話になる。この論稿では、筆者は、1890年代から2010年代までの約120年の歴史的蓄積を伴わせて、「自己実現」についての大雑把な年代順の概要を記述した。あたかも各々の文中における「自己実現」という単語が決して同じではないかのごとく、この言葉の意味は劇的に変化してきたことや、今となっては表層的にも深層的にも様々な意味を持っていることが明らかである。それゆえに、この状況が「自己実現」以外の他の曖昧な多くの言葉にも明らかに当てはまることを考慮するならば、筆者としては、どんな言葉であっても、我々が慎重に探求しないで済ましてはならないことを強調したいのである。

なお、筆者としては、こうした歴史帰納的アプローチを基軸としつつも、教育実践に応用する形で自己実現概念をどのように応用すべきかについて、「自己実現そのもの」と「自己実現のもたらす効果」とを分ける形で理解するような提案も同時に行っている<sup>4)</sup>。

### 一註一

- 1) 佐々木英和「日本語『自己実現』の歴史的原点についての実証研究－『自己』でなく『自我』である深み－」、宇都宮大学共同教育学部編『宇都宮大学共同教育学部研究紀要』第71号第1部、2021年所収、375頁。
- 2) 同上、375～376頁。
- 3) 1991(平成3)年に発行された『広辞苑[第四版]』には、そもそも「自己実現」という見出しが存在していなかったが、1998(平成10)年に発行された『広辞苑[第五版]』では、ようやく「自己実現」が見出し語になったのである(同上、369頁)。

- 4) 佐々木英和「自己実現の人間教育論的意義」(第3章)、杉浦健・八木成和編著『人間教育の基本原則—「ひと」を教え育てることを問う』、ミネルヴァ書房、2020年所収、49～67頁。

### —参考文献—

- 佐々木英和「『自己実現』の教育論・学習論的意義の検討—時間論的視点からの一考察—」、東京大学教育学部編『東京大学教育学部紀要』第33巻、1993年所収、247～256頁
- 佐々木英和「自己実現の実践論的意義の序論的考察—〈主体〉形成の力動論という視点から—」、東京大学教育学部社会教育学研究室編『社会教育学・図書館学研究』第18号、1994年所収、43～53頁
- 佐々木英和「自己実現概念の変容と生涯教育政策」、東京大学教育学部社会教育学研究室編『社会教育学・図書館学研究』第19号、1995年所収、11～21頁
- 佐々木英和「生涯学習実践の学習課題に関する理論的研究—A.H.マズローの欲求理論の批判的継承を軸として—」、東京大学大学院教育学研究科・生涯教育計画コース・社会教育学研究室編『生涯学習・社会教育学研究』第20号、1996年所収、21～30頁
- 佐々木英和「90年代的自己実現観の様相と構造—メディア環境の展開を見据えて—」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第48号第1部、1998年所収、219～233頁
- 佐々木英和「自己の『いま』とつきあうこと…『時代—世代』論的困難の直視として」、日本人間性心理学会編『人間性心理学研究』第16巻第1号、1998年所収、22～29頁
- 佐々木英和「自己実現概念の把握方法に関する序論的考察」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第49号第1部、1999年所収、109～123頁
- 佐々木英和「『自己肯定力』を育む教育の原理と可能性」(第4章)、人間主義心理学会編・上田吉一責任編集『人間の本质と自己実現』、川島書店、1999年所収、58～86頁
- 佐々木英和「『自己実現史』の構築に向けた方法論的考察」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第50号第1部、2000年所収、193～207頁
- 佐々木英和「自己実現概念を把握するための言説論的方法」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第51号第1部、2001年所収、265～279頁
- 佐々木英和「ケータイ・インターネット時代の自己実現観—『自分探し』と『居場所探し』とが陥るジレンマ—」(5章)、田中治彦編著『子ども・若者の居場所の構想』、学陽書房、2001年所収、84～105頁
- 佐々木英和「自己実現概念を把握する上での用語論的考察(1)—主に研究対象の範囲を再確認するために—」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第52号第1部、2002年所収、209～223頁
- 佐々木英和「自己実現概念を把握する上での用語論的考察(2)—研究対象の具体的内実を掘り下げることのための前提的議論—」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第53号第1部、2003年所収、141～155頁
- 佐々木英和「生涯学習における標準化と個性化をめぐる問題」(第14章)、鈴木眞理・梨本雄太郎編『生涯学習の原理的諸課題』、学文社、2003年所収、195～211頁
- 佐々木英和「自己実現概念の価値論的位置づけに関する一考察—用語の歴史的出自を踏まえた実証的研究—」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第54号第1部、2004年所収、219

～ 233 頁

- 佐々木英和「戦前日本における『自己実現』の社会的受容—グリーン思想の国家主義的歪曲をめぐる覚書」、イギリス理想主義研究会編『イギリス理想主義研究年報』創刊号、2005 年所収、28～37 頁
- 佐々木英和「自己実現についての歴史研究に関する手続き論」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第55号第1部、2005年所収、211～225 頁
- 佐々木英和「自己実現概念の歴史的展開に関する覚え書き—19世紀末から21世紀にかけての日本の変容の概観—」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第56号第1部、2006年所収、213～227 頁
- 佐々木英和「自己実現概念を方向づける歴史的基点に関する覚え書き—『人格の完成』概念との親和性を例題として—」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第57号第1部、2007年所収、195～209 頁
- 佐々木英和「自己実現思想における個人主義・国家主義・神秘主義—人格概念の多元的展開に関する試論的考察—」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第58号第1部、2008年所収、265～280 頁
- Sasaki,H.“Self-Actualization and/or Self-Realization in Japan: A Historical Approach to its Various Aspects,” 宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第59号第1部、2009年所収、157～172 頁
- 佐々木英和「『自己実現』言説の歴史社会学—特に思想の輸入・受容過程に焦点を当てた実証研究—」(平成17～20年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号17530605研究成果報告書)、2009年、全94 頁
- 佐々木英和「自己実現概念の歴史的変容を実証するための予備的考察—データベース分析を目安として生かした発見的研究—」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第61号第1部、2011年所収、145～158 頁
- 佐々木英和「自己実現のパラドックスに着目して」(『特集』理事会企画シンポジウム「個人と集団の良い関係」)、日本人間性心理学会編『人間性心理学研究』第29巻第1号、2011年所収、9～17 頁
- 佐々木英和「現代日本語『自己実現』の使われ方に関する基本的考察—テキストマイニングの手法を用いた質的データの分析—」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第62号第1部、2012年所収、225～238 頁
- 佐々木英和「自己実現」、日本人間性心理学会編『人間性心理学ハンドブック』、創元社、2012年所収、160 頁
- 佐々木英和「現代日本語『自己実現』の意味内容の変質—テキストマイニングの手法を用いた通時的考察—」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第63号第1部、2013年所収、251～270 頁
- 佐々木英和「明治中後期における自己実現思想の輸入の様相—日本語『自我実現』の創造にイギリス理想主義が果たした役割—」、行安茂編『イギリス理想主義と河合栄治郎』、世界思想社、2014年所収、196～212 頁
- 佐々木英和「日本の自己実現思想における『個人と社会との調和』概念の倫理的展開と社会的受容」



- (公益財団法人上廣倫理財団研究助成、平成24年採用「研究課題」、2014年、全13頁(未公表)  
 佐々木英和「現代日本語『自己実現』の特徴を実証する基礎データの提示－質的データの量的把握による整理－」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第64号第1部、2014年所収、221～246頁
- 佐々木英和「(続)日本の自己実現思想における『個人と社会との調和』概念の倫理的展開と社会的受容」(公益財団法人上廣倫理財団研究助成、平成25年採用「研究課題」、2015年、全22頁(未公表)
- 佐々木英和「自己実現言説における『社会』の位置づけに関する一考察－テキストマイニング手法による新事実の発見と実証の試み－」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第65号第1部、2015年所収、229～248頁
- 佐々木英和「自己実現言説における『社会』の意味合いについての歴史的考察－テキストマイニング手法による量的研究と質的研究との接合の試み－」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第66号第1部、2016年所収、223～248頁
- 佐々木英和「自己実現言説における『個人』の現代的意義－テキストマイニング手法による特定日本語の位置づけと意味づけの探究－」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第67号第1部、2017年所収、211～228頁
- 佐々木英和「『学問の骨抜き化』は繰り返されるのか？－哲学館事件に対する学術的対応を手がかりとして考える－」、イギリス理想主義学会編『イギリス理想主義研究年報』第13号、2017年所収、54～56頁
- 佐々木英和「自己実現言説における『個人』の位置づけについての歴史的考察－テキストマイニング手法による仮説検証と新事実発見の試み－」、宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第68号第1部、2018年所収、281～298頁
- 佐々木英和「個人的自己実現についてのテキストマイニング分析－『個人』概念の個別具体性の再発見－」宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部紀要』第69号第1部、2019年所収、273～290頁
- Sasaki, H. “Historical Outline of Self-Realization and/or Self-Actualization in Japan: The 120-Year History of the Japanese Word “Jiko-Jitsugen” (日本におけるセルフ・リアリゼーションとセルフ・アクチュアリゼーションの歴史的概略－日本語「自己実現」の120年の歴史－)”, 宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部研究紀要』第70号第1部、2020年所収、419～432頁
- 佐々木英和「自己実現の人間教育論的意義」(第3章)、杉浦健・八木成和編著『人間教育の基本原則－「ひと」を教え育てることを問う』、ミネルヴァ書房、2020年所収、49～67頁
- 佐々木英和「日本語『自己実現』の歴史的原点についての実証研究－『自己』でなく『自我』である深み－」、宇都宮大学共同教育学部編『宇都宮大学共同教育学部研究紀要』第71号第1部、2021年所収、367～384頁

## 【追記】

本稿は、筆者が英語で論述した拙稿“Historical Outline of Self-Realization and/or Self-Actualization in Japan: The 120-Year History of the Japanese Word “Jiko-Jitsugen” (日本におけるセルフ・リアリゼーションとセルフ・アクチュアリゼーションの歴史的概略－日本語「自己実現」



の120年の歴史—)”(宇都宮大学教育学部編『宇都宮大学教育学部研究紀要』第70号第1部、2020年所収、419～432頁)を和訳して、それを基本として構成した日本語論文である。ただし、新たに書き加えた内容が若干あるので、それらについては、註で示し、すぐにわかるようにしている。また、それに応じて、論文のタイトルに変更を加え、要約や註については新たに書き起こすとともに、参考文献については、筆者執筆による自己実現関連論文に絞って選定し直しを行った上で、改めて書き起こした。他には、英文で“Introduction”と示していた部分に見出し番号を振り、「1 導入的議論」として、それ以降の見出しの番号も変更した。

令和3年10月1日受理





A Note on Historical Transformation  
of the Implications  
of the Japanese Word *Jiko-Jitsugen*  
Indicating  
Self-Realization and/or Self-Actualization

SASAKI Hidekazu